訂正

# 中等國文讀本

國學院編輯部編纂

一の巻

375.9
Ko 11
資料室

42009
教科書文庫
4
810
41-1907
20000
64990

375.9
Ko 11
資料室

明治四拾年貳月拾八日
文部省檢定濟
中學校國語科教科用書

# 國學院編輯部編纂

# 訂正 中等國文讀本

東京
合資會社吉川弘文館發行

広島大学
教
64990
図書



訂正 中等國文讀本卷一

目次

第一 伊勢詣……一
第二 國體……四
第三 國旗……七
第四 勅語捧讀（新體詩）……十
第五 蒸氣機關の發明……十二
第六 咸臨丸の初航海（口語體）……十六
第七 伊能忠敬……二十四
第八 旅順戰中奇話……三十

明道中學校生徒
第三學年ミ班
永井

第九　黃海の戰（その一）……三十七
第十　黃海の戰（その二）……四十四
第十一　黃海の戰（その三）……五十四
第十二　小話二則……六十一
一、六太夫の晴雨計……六十一
二、熱地の蜜蜂……六十三
第十三　コロンブスの卵……六十五
第十四　見識……六十八
第十五　十四歳の賴宣（口語體）……七十一
第十六　五腰の刀の主……七十三
第十七　天野屋利兵衞……七十五





第十八　アイヌの昔話その一……八十二
第十九　アイヌの昔話その二……八十六
第二十　臺灣の風俗……九十一
第二十一　石炭の話……九十七
第二十二　汽車の路……百三
第二十三　遠足（新體詩）……百五
第二十四　海水浴……百七
第二十五　霧の都……百十一
第二十六　自然の音樂……百十四
第二十七　蚜蟲の一生……百十七
第二十八　時間を惜むべし……百二十三

第二十九　紙筆の學問……百二十六
第三十　日本魂……百二十七

訂正

# 中等國文讀本卷一目次 終

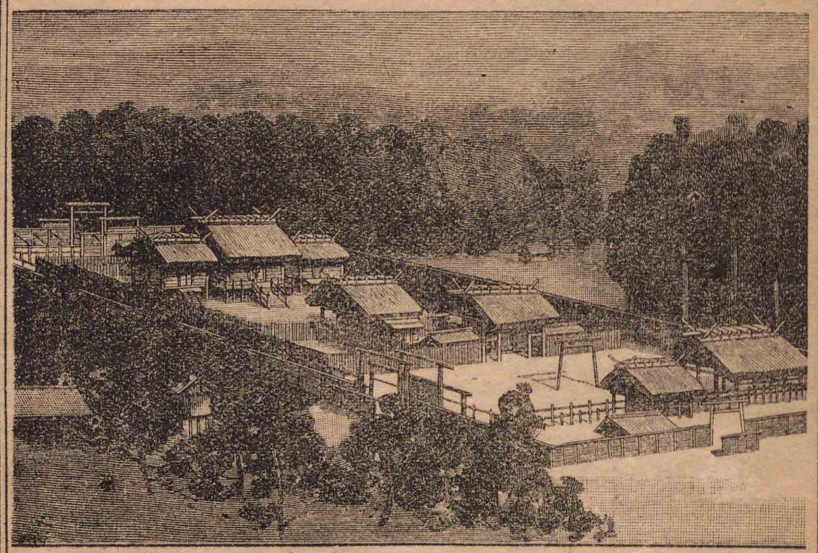
訂正

# 中等國文讀本卷一

## 第一　伊勢詣

外宮前なる旅宿に着き、窓を開けば、右は高倉山の石段高く綠深き木の間に仰がれ、前は青田遠くして高嶺を雲に埋めたる山に向へり。あれはと問へば神路山なりといふに、さてはあの麓こそ內宮のまします處よと、いとかしこし。

翌日、雨甚しけれど、いつ晴るべしとも思はれねば、



ぬれながら參宮す。相の山をかなたへおるれば宇治の町なり。五十鈴川の御橋をわたるに、雨横さまに吹きつけられて、逆まき流るる水いと白し。

神苑に入れば早くも心はあらたになりぬ。劉公島より持ち來れる戰利品などおかれたり。しばらく行き





て、木立涼しく枝うち垂れたる川邊に身を清むる處あり。おりたちて手洗ひ口すゝぐ。

雲に聳えて立ちならべる木々の下道、奥へ〳〵とゆきて、一の御門より拜し奉る。御門には白布かゝりて、中には鳥居の左右に幣をつけたる小柴垣あり、其の奥に又白布垂れたる御門ありて、其の中なるぞ正殿におはします。千木鰹木の黄金もておほはれたるが、空高く仰がるゝのみ。

祈らんと思ひしことも忘れけり
たゞたふとさの限なければ（大和田建樹）

## 第二　國體

我が國は、建國以來一系の天皇を戴き、神武天皇よりこなたも、既に二千五百餘年を經たれども、未だ曾て一度も外侮を受けず。是本邦人の生れながら剛勇なるにも由るべけれど、殊には君民のなからひ他邦と違ひて、君の民を惠み、民の君を敬ふことの、優れたるに由るべし。

つら〳〵上代の有樣を思ふに、君は父兄の如く、民は子弟の如くにして、君民のさま一家族の如くなれば、忠を以て君に仕へ、孝を以て親に事ふるのみ





ならず、君に事ふるには忠と孝とを兼ぬる故に、民はひとへに君のために忠勤を勵み、君はひたすら民の安寧幸福を慮り給ひき。されば高臺に登り給ひても、民の烟御心にかゝり、寒夜に會ひ給ひても、先づ民の肌を思し出で給へり。

近くは彼の六百年の武家の政治もたちどころに朝廷に還り、數百の諸侯も忽にして版籍を奉還せしが如き他邦に類なき事も出で來たり。人民の中には、もとその祖先の外國より歸化せしものなるも少きにあらねど、皆我が國風に化せられて、聊も

違へる所なし。近く我が國の民となりたる臺灣の土人、その他近く歸化せる外國人等も遂には皆然るべし。

あゝ本邦に生れ出でて、この美俗の人となり、更にこの聖世に遭遇したるは、誠に無上の幸福なれば、學者は學術を研き、軍人は、武事を究め、農工商も各其の業を勵み、相睦び相親みて、古人の古代に勉めたりし心を失はず、名に負へる日の本の國の光を、よろづ代に遠く久しくかがやかすべきなり。

（三島通庸）





## 第三　國旗

國旗は、一家の紋章などと同じく、自他の區別を明にする必要に基づきて制定せるものなれば、其の色彩及徽章などは、おのづから國民の崇尚を顯し、又その國の歷史を說明するものなり。

我が國旗の、純白なる地に鮮紅なる圓形を描けるは、無限の大空に照臨せる太陽を寫せるものなること、之を日の丸の旗といひ、日章旗といふにて明なり。此の旗の國旗として公に定められしは、明治五年十一月なれば、三十餘年前の事に過ぎざれど

も、是が來歴は極めて古く、其の淵源をいへば、天照大神を日の神と仰ぎ、代々の天皇を天津日嗣と崇め奉りし國初よりの思想に基づき、最も尊ぶべき形象として、早くより諸種の紋章に用ゐ來りしものなり。されば何れの時代を起源と定め難けれども、安政元年七月の布令により、大船の船印として全國一般に此の旗を用うべしと定められしは、現に用うる國旗の直接の起源といふべし。

われらが此の國旗に對するや、實に言ふべからざる感情を起す。試に之を言はば、赫々たる太陽の象





は皇祖天照大神の神德を仰がしめ、其の圓滿にして盡くる所なき形狀は、連綿無窮なる皇統の下に、國の繁榮限なきを示し、色彩の鮮紅なるは、君國に對する國民の丹心燃ゆるが如くなるを顯し、地の純白なるは、民性の清明潔白なるを表するものと見るべし。

抑も國の譽は卽ち國旗の譽にして、國旗の譽は又國民の愛國心を增進するものなれば、國民たらん者は、常に國旗の榮辱を念ひ、益其の名譽を發揚せんことを勉めざるべからざるなり。

# 第四　勅語捧讀

一

千代田の宮に千代かけて
世をしろしめす大君の
くだし給へるみことのり
萬の民のよろづ代に
よるべき道はこゝにあり
ゆくべき道はこゝにあり

二

ひとりの君をいただきて





ふたりの親をかしづきて
いもせはらから友がきも
睦びあひつゝみ教に
そむかぬまことあらはさん
たがはぬまことあらはさん

三

水穂の國に生れ來て
大御寶の名を得つゝ
御代を守らんわがともの
道のしるべのみことのり

仰ぎて讀まん朝夕に
ふして思はん夜晝に（坂正臣）

## 第五　蒸氣機關の發明

ナポレオン一世が「世界の狀態を一變すべきものは是ならん」と言ひし蒸氣機關は、今やあまねく世界萬民に利用せられて、果して世態を一變せしめたり。抑も此の機械の發明は、今よりおよそ二百年以前に、英國の一貴族が、獄中に在りて爐中の罐子の湯氣を吹きて、其の蓋を上ぐるを見、蒸氣の力の





強大なるに氣づき、種々工夫の後、遂に一種の機械を作りたるに始る。

然れども、此の發明は尙甚幼稚なるものにして、僅に之を喞筒に用うるに過ぎざりしが、之を應用して、現今行はる、如き蒸氣機關を作れるは、實にジエームスワットの功なり

ワットは英國蘇格蘭の人にして、西暦千七百三十七年に生る。天性怜悧にして、物理の考索を好みしが、後グラスゴー大學の機械製造に從事し、多年の苦心を經て、遂に驚くべき新蒸氣機關を工夫し、後

更に之を應用したる機關車を製して、其の專賣特許を得たり。

後この機關を船にも應用せんと企て、種々工夫を凝して、遂に成功せしは、米國人ロバートフルトンなり。千八百七年、フルトン、蒸氣機關を据ゑ付けたる兩輪船を、ホドソン河に浮べて試運轉を行ふ。見物の群衆皆嘲笑して曰はく、かゝる船のいかで動くべきと。豈測らんや、此の船紐育を發して、無事アルバニーに著せしかば、曩に氏を嘲りし人々、皆自ら耻ぢて、其の思考の巧妙なるに感ぜざるはなか





りき。是よりフルトンの名譽大に揚り、蒸氣船の製造廣く行はれて、今日の有樣に至れり。

さて此の蒸氣機關を完成して、今日の如き蒸氣車を作りしは、英國人ジョージステブンソンの功なり。氏は、千八百二十五年、英國下院の委員より、暗夜蒸氣車の進行せば、赤熱したる烟突は、動物を恐怖せしめ、それより發する毒氣は、飛鳥を殺し、馬を斃す事なきか等の、詰問を受けたるにも拘らず、同二十九年には、一時間三十五哩の割合にて駛走する、機關車を造り得て、大に衆人を驚ぜり。

爾來蒸氣機關の製造は長足の進歩をなし、今日百般の工業運輸交通の事業等、一として其の恩惠を享けざるものなし。されば之を發明せるワット・スチブンソン・フルトンの功は、實に千古不磨なりと謂ふべし。

## 第六　咸臨丸の初航海

日本の人が、始めて蒸氣船といふものを見たのは嘉永六年、航海を學び始めたのは安政二年の事で、長崎で和蘭人から傳習したのである。さてその修業が終って、外國に船を乘り出さうといふことを決したのは、安政六年の冬、即ち目に蒸氣船を見てから足掛け七年目、航海術の傳習を始めてから五年目である。

それで、萬延元年の正月に出帆しようといふその時、此の航海には、外國人の手を假らずに行かうと決斷した。その勇氣といひ、伎倆といひ、たしかに、日本國の名譽として、世界に誇るに足るべき事實であらうと思ふ。今の朝鮮人、支那人、東洋全體を見渡した所で、航海術を五年學んで、太平洋を乘り越さ

うといふ、企や勇氣のあるものは、決してありはしない。それ所ではない、むかし露西亞のペートル帝が、和蘭に行って航海術を學んだといふが、ペートル帝でも、かやうな事は出來なからう。固より帝は一種絶倫の人傑であったけれども、當時の露西亞には、日本人のやうに大膽に、かつ學問思想の緻密な國民は、容易になかったらうと思はれる。

さて、此の時の船は、咸臨丸といふ和蘭出來の軍艦で、長さは三十間位、乘組員は上下合せて百餘名位、極めて小い船であった。それに、此の頃遠洋航海を





するには、石炭は焚かず、帆ばかりでやるので、咸臨丸は、何遍か風波の爲に難船しかゝったけれども、乘組員は、何れも覺悟の上ではあり、血氣ざかりの者ばかりであったから、さ程心配もせず、桑港に著いた。

さうすると、日本人が獨で軍艦に乘ってこゝに來たのは、是が初だといって、大層歡迎され、土地の重立った人々が、船まで來て祝意を表する。陸には、見物人が黑山の樣に集ってゐる。續いて、陸から祝砲を擊つといふことになったが、あちらから擊てば、

こちらからも應砲せねばならぬ。この事に就いて、一奇談がある。

勝麟太郎といふ人は、艦長木村の次に居て、指揮官であつたが、出立前から熱病で苦んでゐたのを、推して乘り込んだので、船中でも吐血したことも度々あつたが、著港の頃には自然に全快し、指揮官の職として、萬端差圖するうちに、祝砲のことが起つた。そこで、勝の説に、「それはとても出來る事でない。なまじひ應砲などして遣り損ふよりも、こちらからは擊たぬ方がよからう」といふ。さうすると、運用





方の佐々倉桐太郎は、「いや〳〵、うてないことはない。おれがうつて見せる。」「どうして貴樣たちに出來るものか。それが出來たらおれの首を遣る」と冷かされて、佐々倉はいよ〳〵承知しない。何でも應砲して見せるといふので、それから、水夫どもを差圖し、大砲の掃除、火藥の用意をして、砂時計をもつて時を計り、物の見事に應砲が出來た。さあ佐々倉が威張り出した。「首尾克く出來たから、勝の首はおれのものだ。しかし航海中は用も多いから、しばらく當人に預けて置く」といつて、大に船中を笑はせた

ことがある。ともかくも、まづ祝砲だけは立派に出來た。

それから、船底の掃除や、ペンキの塗換なども、むかうの人の世話で滯なく濟んだ。さて、歸りには南亞米利加を廻らうといふ事になり、亞米利加人などが「此處まで來れば澤山だから、そんな無謀な事は止めて、早く日本へ歸れ」と、たつて勸めるけれども、乘組員はなか〳〵そんな事には耳も傾けない。所が、丁度亞米利加に來て居つた日本の使節が、此の事を聞き込み、狂氣の沙汰だといつて、斷然南米廻





航を禁じた。これには一言もないので、すご〳〵歸國の途に上り、布哇に立ち寄つて、それから浦賀に著いた。

すると間もなく、浦賀奉行の命だといつて、取手がどや〳〵と船中に蹈みこんで來た。事の意外に、勝は「無禮者何をする」と一喝した所が、取手がいふには「五六日前、井伊大老が櫻田で殺されたに就いては、水戸人は嚴重に取り調べねばならぬ」といふ。そこで、勝は「亞米利加には水戸人は一人も居ないから、安心してすぐ歸れ」といつて、遂ひかへしたとい

ふことである。（福翁自傳、氷川清話に據る）

## 第七　伊能忠敬

學術未だ開けず、器械も甚疎惡なる時代に在りて、我が日本全國の海岸を測量し、今日の最も精良なる器械を以て、測量したるものと、少しの差もなからしめ、我等後人が、その惠を被るのみならず、嘗て外人を驚嘆せしめて、我が國の光を添へたるものを、誰とか知る。下總の一隅より起りたる、伊能忠敬是なり。





忠敬は、上總の國武射郡小堤村なる神保某の子にして、十八歳の時、伊能長由の養子となれり。伊能氏は、下總の國香取郡佐原村の豪家にして、世々酒醬油の釀造を業とせしが、長由早く死して、家産稍衰へしかば、忠敬慨然として之を挽回せんとし、專ら儉素を勉め、奢侈を禁じ、終に家産を恢復して、再豐富を致せり。天明中、關東飢饉の時は、私儲を出して近鄕の窮民を救ひ、官の優賞を被れり。

忠敬素より曆學を好み、家業のひまびまには、之を講じ來りしが、鄙邑にして研究の便なかりしかば、

年五十に及びたる時、其の子に家を讓り、專ら曆學を修めんとて江戸に出でたり。然るに、當時世に行はる、曆法精しからず、斯道の大家といはる、人に質してすら、なほ疑はしき節のみ多かりしを、遂に高橋東岡といふ人に就きて、西洋の曆法を聞くに及び、その說の極めて精確なることを知り、大に喜びて其の門に入り、勤學すること六年間、推步測量の術まず〳〵精を極むるに至れり。

寬政十二年、年五十六歲の時、幕府の命を受けて、蝦夷地を測量せり。その後又命ぜられて、東海道及奧





羽、北陸の沿海を測量し、その業了りて、一大圖を作り、幕府に上れり。幕府その功を賞し、廩米を給して小普請組と爲し、天文方に屬せしめたり。後又山陰、山陽、西海、南海四道の沿海の測量を命ぜられ、圖成りて幕府に上れり。

忠敬測量を始めしより、こゝに至るまで、年を重ぬること十有八、全國の海岸至らざる所なく、その間種々の艱難を冒し、命を危くしたること、幾回なるを知らず。その一例を擧げんに、薩摩の諸島を測量せし時、ある日風惡しく浪甚高かりしかば、舟子等

船を出すを欲せず。その時忠敬叱して、「薩摩人は大膽なりと聞きしに、今は何たる臆病ぞ。風浪何ぞ懼るゝに足らん。速に船を出せ」といへば、舟子等「君もし溺沒を恐れずば、我等何ぞ躊躇せん」とて、乃ち發す。船覆らんとしたること數回にして、辛うじて島地に達するを得たりといふ。この一事にても、その如何に艱難を嘗めたるかを知るに足らん。

最後に、宇内沿海輿地全圖および度數譜、行程記を集成して幕府に上り、文政元年四月十三日、七十四歳にて江戸の賜邸に歿せり。その著せる圖書、前後



數十部ありて、中には散佚せし者も少からざれども、今遺れる地圖等は、實に末代までの遺寶なり。

忠敬、人と爲り朴直にして、精力衆に秀で、齡七十を踰え、白髮肩に被れども、その氣力の盛なること、少壯の人の如くなりきといふ。この氣力あればこそ、かゝる大事業を成し遂ぐることを得たるなれ。明治十六年、朝廷正四位を賜ひて、その功績を嘉賞せられ、又有志の士相謀りて、東京芝公園地内に紀功碑を建てたり。忠敬の榮名は後の世までも永く朽ちざるべし。（教育勅語衍義）

## 第八　旅順戰中奇話

旅順の防禦には露人も百方手を盡して工事を施し、險阻に據りて堡壘を築き、容易に破り難し。明治卅七年八月、一夜我が軍夜襲を行ひしに、壁壘廻りて進み易からず。特務曹長石黑浩幹といふは、勇猛なる人にて、かつて地雷の爲に頭の一部に負傷せし人なるが、少しも屈せず、爆發藥を擲つ事六度、遂に一部を破壞したるそのうちに、露兵も丘上より降り來れば我が兵も攀ぢ登り、遂に丘の半腹にて激戰始れり。

その時夜は明けて、彼我互に引揚げたり。されど浩幹はのこりとゞまってなほ激戰せり。一人の露兵、銃槍をもって浩幹の右脇を刺す。浩幹屈せず、これを斬らんとする時、我が兵卒來りてこれを斬り殺せり。又一人の露兵、銃槍をもって擊ってかゝる。浩幹得たりと、刀を奮ってこれを斬らんとせしかば、恐れて逃げ去れり。去らんとするとき、銃を投げつけたるが深く浩幹の腹部を刺す。浩幹屈せずして戰はんとするに、又左の方より露兵來りて左脇を突く。これをば終に斬り拂ひしが、後腹部に五か所

の創を蒙りて倒れたり。

彼我大激戰の後なれば、丘の半腹屍體算を亂して倒れたり。我が兵は五名、浩幹と共に六名なり。露兵は八人。浩幹容貌魁偉にして、美髯あるを以て、天晴士官なるべしと思へり。今は彼我ともに戰ひ疲れて起つこと能はず。我が兵手まねをもつて露兵を呼ぶ。露兵唯々として命を奉じ、我が兵の用を辨ず。我が兵は、負傷して大に渴し、水を飲まむとするに、起つこと能はず。やゝ離れたる處に雨水の如き濁水を見て、汲み來れと命ず。一人の露兵水を汲まむとして丘下に至る。ふかるに、露兵の壘中にあるものは、物ありて動くときは、必ず上より銃を發す。この水汲の露兵は、忽ち上なる露兵に擊ち殺されたり。又我が兵と見ゆる一人、いまだ死せざるものあり。あれを救へといひつけたれば、これも諾して一人馳せゆきしに、又一發の下に死したり。こゝに於いて彼我ともに各六人となる。やがて露兵は己が小銃を携へ來りてこれを交叉し、外套を取りて掩ひ、天幕となして浩幹をその内に容れたり。かゝる所に、我が兵二人いまだ負傷せざるものあり。走り

來りてこの處に至りしに、露兵のいまだ死せざる者ありとみて、これを殺さんとす。浩幹幕中よりゐざり出でて之を停め「その兵は我等が爲に便宜を與へたるものなり。殺す可からず。予は今夜暗に乘じ、此の丘の半腹を降りて歸陣すべし。歸りてその旨を傳へよ」といひて去らしむ。

かくて夜に入りければ、六人の日本兵は、思ひ〳〵に、暗中に匍匐して丘を降るに、浩幹は重傷にて、己が手にて爆破せし壁に至れども、越え難し。こゝに露兵一人後に從ひ來れるを見て、「汝の肩を借しく





れよ」と手まねをもつて示ししに、諾して肩を借したり。かくて壁上に登りしが、又降り難し。ふかるに、露兵はなほうしろに從ひ來るにより、再び之を足溜として、匍匐して降ることを得たり。この露兵は、年廿四歳ばかりの屈竟なる若者なれども、負傷したれば己が陣に歸ることを得ず、なほ浩幹に從ひ來り、遂に我が衞生隊に收容せられて、我が兵と同じく創痍を療せしめらる。されど露兵と我が兵とは一所に在るをゆるされれば、兩人こゝにて別れたり。

その後一週日を經て、我が病院船戰地を發して內地に向ひ、浩幹もまた後送せられたり。此の船に敵の捕虜も多く乘り居るその中に、浩幹を扶持せしものありとみゆ。されど暗中にて知りたるものなれば、分明ならず。ある日その露兵を呼び來らしめ、又手まねをもつて「汝は我を知れりやいかん」と問ふ。彼もまた手まねをもつて「君は我の肩に乘りて降りたり」といふ。奇遇に感じ、手を取り合ひてともに涙にくれたり。その時浩幹は露兵に向ひ「日本人は敵として戰ふ時は飽くまで鬪へども、憫む可き





境遇に在るものをば、力を盡して待遇す可し。汝日本に至らば必厚遇を受けむ。我もまた及ばんかぎり汝を保護すべし、又汝が我輩に對して懇切なりしを復命すべし」とて、此の船の內地の某港に著するまで、殆ど兄弟の如くにして別れたりきとぞ。

（依田百川）

## 第九　黃海の戰　その一

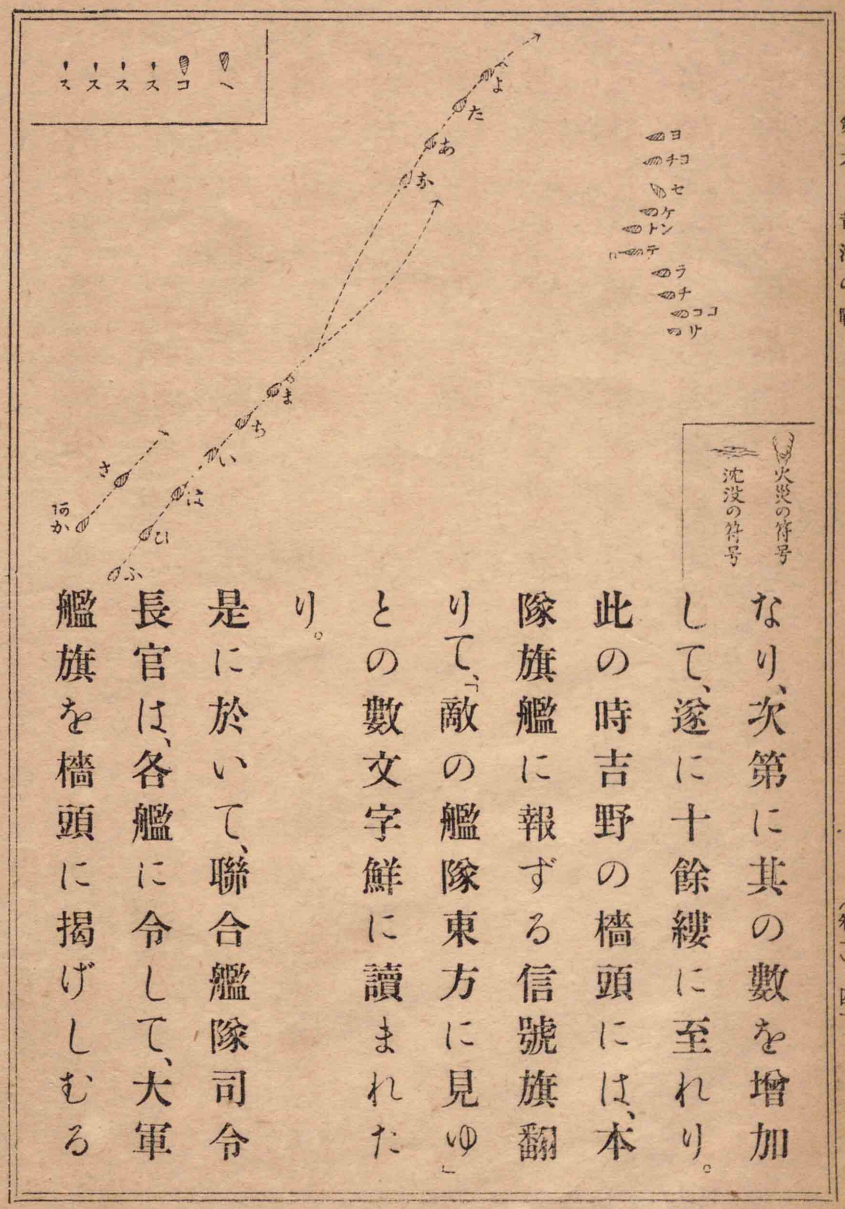
明治二十七年九月、我が聯合艦隊の、第五師團の運兵船を仁川に護送し了ふるや、敵の艦隊を搜索せんが爲、第一遊擊隊、吉野高千穗秋津洲浪速を先鋒

とし、本隊、松島、千代田、嚴島、橋立、比叡、扶桑之に次ぎ、外に赤城及巡洋艦代用西京丸の二艦を隨伴して、九月十六日の薄暮、大同江錨地を發して、威容堂々黄海北部の海洋島に向へり。此の行、伊東司令長官は、參謀以下の幕僚と共に、本隊旗艦松島に在りて、艦隊を總督し、坪井司令官は、第一遊擊隊旗艦吉野に在りて、同隊の指揮を管り、別に大本營海軍參謀官樺山中將は、戰況視察の爲、西京丸に搭乘せり。更闌け、空を仰げば、斷雲横に掠めて、仲秋二八の月光時に明滅し、南風稍威を加へて、海面の金龍蜿蜒





碎けて復生し、波響の韡韡を聞くのみ。我が將士敵を待つこと月餘に及び、會此の壯行に從ひ、意氣激昂して、盡く甲板に集り、必ず敵に會し、一大快戰を試みんことを期せり。東方將に白まんとする頃、海洋島附近に達したれば、司令長官は、先づ赤城をして同島錨地を視察せしめたるに、敵艦あらざるを以て、更に大孤山沖大鹿島錨地に向って、進航すること三十餘海里。時に先頭に在る吉野は、東北東の水平線に當り、一縷の煤煙を認め、針路を其の方向に轉じて、稍相近づけば、一縷は二縷となり、三縷と




なり、次第に其の數を增加して、遂に十餘縷に至れり。此の時吉野の檣頭には、本隊旗艦に報ずる信號旗翻りて、「敵の艦隊東方に見ゆ」との數文字鮮に讀まれたり。

是に於いて、聯合艦隊司令長官は、各艦に令して、大軍艦旗を檣頭に掲げしむる





と同時に、諸艦に起る戰鬪喇叭の聲は、凄曉として水を渡り、日清兩帝國の運命を賭すべき、驚天動地の大激戰は、目前に迫り來りて、殺氣おのづから充滿せり。我が艦隊は汽力を增し、單縱陣を布きて急進し、漸く相近づけば、敵は我が前面右方に在りて、稍凸形なる單横陣に構へ、其の中堅には定遠、鎭遠を、其の左翼には、來遠、致遠、廣甲、濟遠を、其の右翼には經遠、靖遠、超勇、揚威を置けり。此の十艘より成る艦隊は、實に清國海軍の精鋭を集めたるものにして、其の我が軍に向ひ、正々堂々として進航し來る

狀、頗る壯觀を極め、別に其の左方遙なる處に、黑煙を吐きて、二三隻の敵艦控へたり。

伊東司令長官、從容として旗艦松島の艦橋に立ちて、敵軍を望み、左右を顧みて曰はく、「先づ右方なる敵の本隊を粉碎すべし」と。直に之を第一遊擊隊に命ずるや、坪井司令官は、嚴整なる縱陣を布きて、右方敵艦隊の中堅に向ひ、一見之を突貫するものの如く、一直線に猛進し、彼我相距ること殆ど六海里に及びて、俄然左方に轉じ、敵の右翼を擊破し、以て其の全軍の兵氣を挫折せんと企て、愈相近づきて





三海里に達するや、敵の旗艦定遠、一信號を揭ぐると齊しく、其の砲臺より白煙迸り、三十珊半の巨彈、空に叫びて吉野の近傍に落ちたり。かくて敵の諸艦之に倣うて砲擊を開始せり。

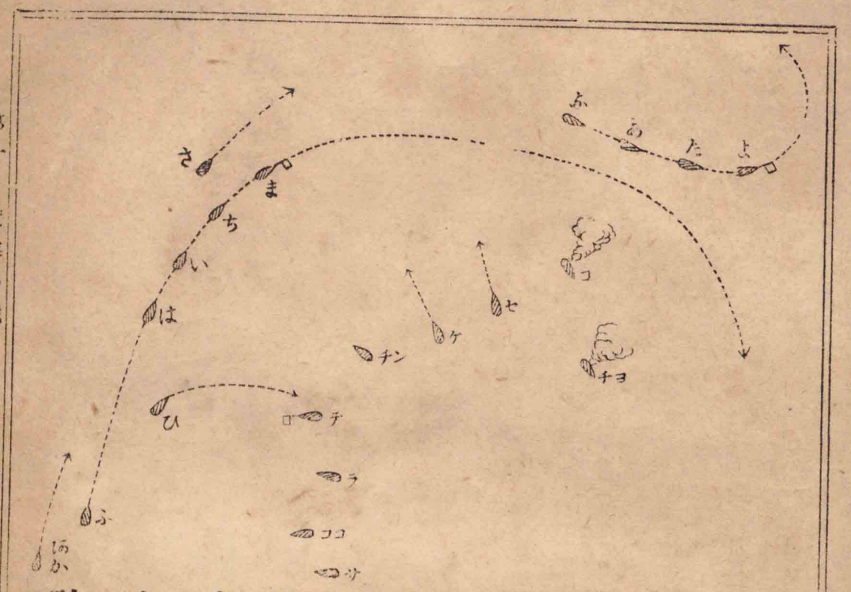
## 第十　黄海の戰　その二

然れども、我が遊擊隊は、距離遠きに過ぐるを以て、自重して未だ應戰せず。十四海里の全速力を用ゐ、飛ぶが如く敵の右翼に向って急進し、忽ち三千米突内外に接近せり。今や好距離と見たる、坪井司令

官が一令の下に、四隻の遊擊隊始めて砲擊を始め、勇戰して、敵の右翼を旋り、波上に半月形の航跡を畫きて、其の背後に出で、更に左方に轉じつゝ、右端の敵艦揚威、超勇を亂射したるに、兩艦火災を發して、其の運轉頗る遲々たり。我が本隊も、遊擊隊と殆ど同一の航路を取りて直進し、敵軍を右舷の正横に望みて、戰を開始するや、敵の凸横陣の中央に在りし、定遠以下の堅艦は、猛然横に衝いて、我が陣形を亂さんとす。我が兵奮鬪して之を擊退せんとせしも、敵少しも屈せず。兩軍漸く接近せり。








時に本隊五番艦なる比叡、稍前續艦より後れて、敵陣の角點に在りしが、定遠來遠之を見て、好機乘ずべしと爲し、急に舵を轉じて、其の右舷に衝突せんとして、猛然迫り來れり。艦長海軍少佐櫻井規矩之左右、意を決し、單獨に陣列を離れて、敵艦隊の中間に突入し、殊

死して戰ふ。來遠之を捕獲せんと欲して、兵士皆銃鎗を提げて甲板に集る。比叡乃ち機關砲を急射して、殆ど之を鏖殺せり。敵逡巡して近づくこと能はず。更に魚形水雷を放ちたりと雖、艦尾を僅に離れて通過し去れり。比叡益奮戰して、尚數艦に當り、終に敵彈の爲に大檣頭上なる軍艦旗破れ、旗索も切斷せり。乃ち他の軍艦旗を最も高き檣桁端に掲げ纔に包圍を脱して、本隊に合せんとせしに、定遠より放てる三十珊半の榴彈に、深く舷側を貫かれ、艦尾の内部盡く破壞し、大火災を起して、殆ど戰鬪力

を失ひたるを以て、「われ火災のため列外に出づ」と信號を掲げ、南西に向て航駛せり。

赤城は六百噸の小艦なるにより、開戰に先だち、司令長官の命を受けて、西京丸と共に本隊の左側に避け居たるが、其の速力本隊に續行すること能はずして、

自然孤立の地に陷れり。敵は比叡を逸したる際なれば、之を見るや、急に赤城を圍み、四方より亂射すること宛も急雨の如く、之が爲に兵士の斃るゝもの數十人に及べども、奮鬪力戰して、最も近く進み來れる來遠を痛擊し、艦橋上殆ど人なきに至らしむ。忽ち一彈飛び來りて、我が艦橋の砲架に中り、其の一大彈片反飛して、折柄海圖を展べて戰を督せる、艦長海軍少佐坂元八郎太の頭蓋を微塵に打ち碎けり。先任將校既に傷つきたるを以て、航海長代りて戰を督す。





時に兵士多く死傷したるを以て、これを補はんがため、一時は信號兵をも砲員に充て、頻に諸砲を放ち、敵艦來遠、致遠、廣甲等に當りたるに、數發の敵彈我が大檣を倒し、其の檣頭に翻翻たりし我が軍艦旗も、亦甲板に落下せり。航海長乃ち大呼して、速に他の軍艦旗を掲げんことを命ず。語未だ畢らざるに、二三の兵士走り來り、折斷せられたる大檣頭に登り、直に一竿を樹てて、新軍艦旗を掲げ、又他旗を信號索に結び、之を前檣頭に掲揚せり。是に於いて、旭日章復烟煙中に威彩を放てり。されど敵の追擊

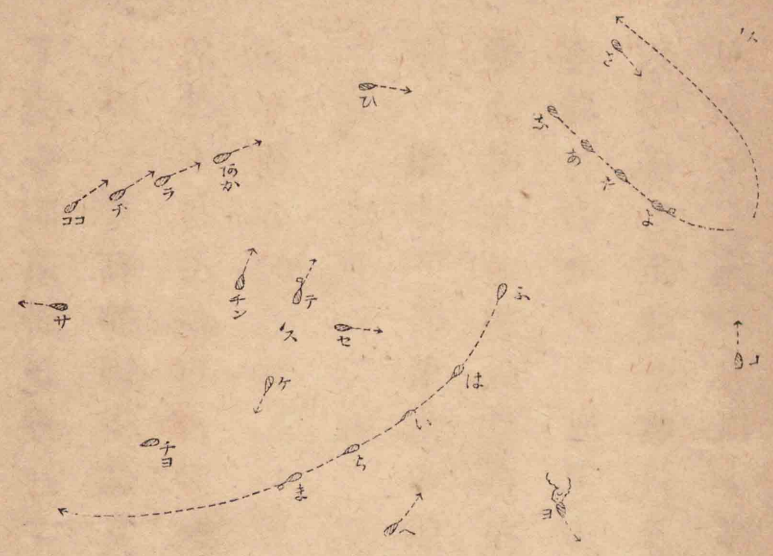
は愈甚しく、僅に數百米突の近距離に迫り、來遠が放てる彈丸は、再我が艦橋に中りて航海長を傷つく。二番分隊長其の治療の間これに代れり。時に敵艦愈近づき、苦戰萬狀、殆ど沈沒の不幸に罹らんとせしも、終に來遠を擊つて烈しき火災を起さしめたるに因り、他の敵艦倉皇これを救はんとして、其の近傍に集りたるを以て、赤城幸に虎口を脫することを得たり。

是の時に當り、西京丸は「比叡、赤城危險」との信號を揭げて、これを諸艦に告げしが、次いで敵艦定遠以





下四隻に追躡せられ、十一發の彈に貫かれて汽管を破り、蒸氣舵機頓に其の用を失へり。因りて直に豫備索を用ゐたるも、操縱意の如くならず。速力を減じ、人力舵機を具へ、更に全速力を以て航駛する際、新に敵軍に加れる平遠、廣丙の二隻、水雷艇を前後に控えて襲來するを認め、先づ前進せる水雷艇を急射して之を退け、次いで二艦と一戰を交へて通過せしに、忽ち後部に在りし水雷艇福龍號、全速力を以て猛進し來れり。是に於いて西京丸艦首を之に向け、衝突して乘り沈めんと試みしも、轉舵意



の如くならざる爲、目的を達すること能はず。敵之に乘じ、兩回水雷を發射せしも、奇効を奏せず。憤激してなほ四十米突の近距離に迫り、復一發を試みたるに、水雷は一線を海面に曳き、我が中腹を指して飛び來り、大事將に去らんとす。時に樺山中將、艦橋に儼立し





て之を睨み、神色變ぜず、乘員も亦死を決して、泰然たりしに、何等の天祐ぞ、水雷は艦底を潛過し去れり。すなはち無事に戰域を脱して、大同江に向ふことを得たり。

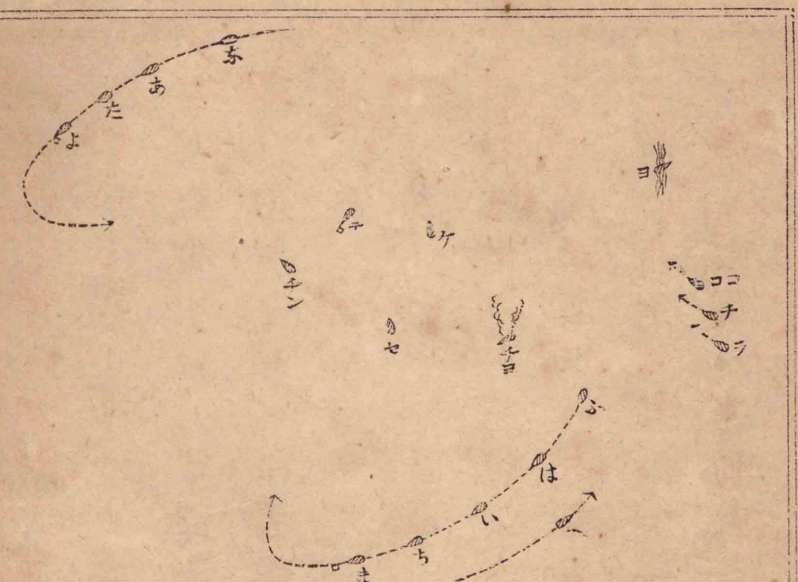
## 第十一　黄海の戰　その三

是より先、遊擊隊は再左旋して、敵の右翼を巡れる本隊に合せんとせしが、會西京丸の信號を見て、比叡、赤城の危急を救はんと欲し、航路を轉じ、全速力を出して、先づ赤城と敵艦隊との中間に向ふ。敵之

に對して、其の半隊は、左を先鋒としたる雁行に備へて、我に迫り、他の半隊は、赤城、比叡を捨てて引返せる數艦と合し、單縱陣を以て我に當れり。時に本隊は砲擊を續け、敵艦隊を一周して、遊擊隊の反對側に在り、兩々相應じて、右に六隻、左に四隻の敵艦を夾擊す。戰今や猛烈となり、兩軍の兵氣燃ゆるが如く、數里の海面、戰雲漠々、電光閃々、巨礮轟き、水柱立ち、兩國海軍の主力を集めたる二十餘隻の堅艦、一離一合、乍ち進み乍ち退き、奮鬪數時間の久しきに渉り、敵軍の運動大に亂れて、陣形を保つこと能








はざるに至れり。

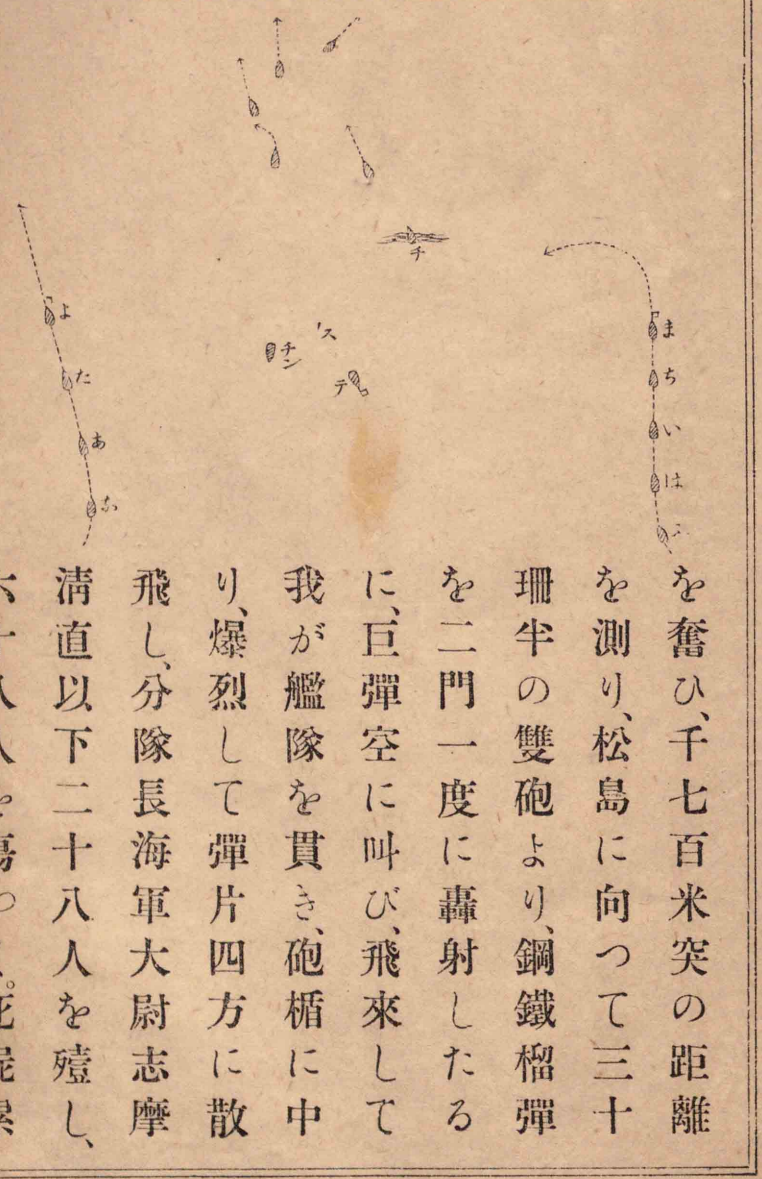
開戰の初、敵の諸艦は信號に由りて進退せしが、旗艦定遠の檣頭、我が砲彈に折られ、信號旗を揭ぐべき小索、盡く切斷せるを以て、復信號を行ふこと能はず。諸艦勉めて定遠の運動に從ひ、屢方向を轉じたるも、我が艦隊の旋回、頗る巧妙迅

速なるに因り、おのづから各艦一致の運動を缺き、或は西し或は東して、動亂益甚しく、超勇既に沈沒し、揚威は淺瀨に乘り上げ、致遠も亦次いで沈み、定遠、來遠、平遠は火災を發したるを以て、其の他の敵艦終に支ふること能はず、濟遠、廣丙先づ逸し、廣甲、經遠、靖遠之に次ぎて大連灣の方に向ひ、沿岸淺處を望みて遁走し、殘り止りたるものは、旗艦定遠と、之を守護せる鎭遠、及一隻の水雷艇とのみ。

是に於いて艦隊二つに別れ、遊擊隊四隻は逃艦を追ひ、本隊五隻は定遠、鎭遠に當れり。鎭遠必死の勇








を奮ひ、千七百米突の距離を測り、松島に向つて三十珊半の雙砲より、鋼鐵榴彈を二門一度に轟射したるに、巨彈空に叫び、飛來して我が艦隊を貫き、砲楯に中り、爆烈して彈片四方に散飛し、分隊長海軍大尉志摩清直以下二十八人を殪し、六十八人を傷つく。死屍累

積して、骨肉碎け、鮮血流れ、鋼鐵の舷板は五間餘飛び離れて、艦骨露れ、備砲も亦概ね破壞し、復用を爲すこと能はざるに至れり。砲術長急に軍樂員三名を以て砲員を補ひ、僅に一門の砲を整へ、なほ敵を擊つ。是の時、艦橋上に在りし、伊東司令長官、參謀長海軍大佐鮫島員規を顧みて曰はく、「本艦大破して、今は戰鬪力を失へり。如かず、他艦をして各自隨意に追擊せしめんには」と。次いで諸艦に向ひ、旗艦に關せず追擊せよとの命令を下せり。

是より先、遁走せる敵艦は、我が遊擊隊に追躡せら





れて愈狼狽し、濟遠、廣丙、西北西に逃れ、經遠之に續き、火炎に包まれたる來遠は、靖遠と共に、方向を轉じて小鹿島の方に向ひ、平遠、廣甲は水雷艇數隻と共に北方に走れり。旗艦吉野は、經遠の未だ破損せざるを見て、全速力を以て猛然近距離に迫り、十餘の砲門を開きて、一齊に之を急擊するや、黑煙艦内に漲り、乍ち左舷に傾き、爾餘の三艦にも砲擊せられ、縱横に旋轉せしが、遂に左轉して沈沒せり。

時に夕陽已に沒して、我が兩艦隊は南北に相隔りたるを以て、伊東司令長官は遙に遊擊隊を招き、之

と合し、定遠鎮遠も他艦を收集して南方に航し、威海衛に逃れんとする者の如し。司令長官思へらく、夜間更に砲火を交ふるは、啻に隊列の混亂を來す恐あるのみならず、敵は水雷艇を率ゐ居れば、之を追究するは策の得たる者にあらずと。乃ち曉天を待つて、彼を威海衛沖に遮ることに決す。而して旗艦松島は損害最も甚しきを以て、是の夜司令長官は、幕僚と共に軍艦橋立に轉乘して、艦隊を率ゐ、遙に敵艦隊と並行せりと想はるゝ、航路を執りて進みしに、天明に及び全く相失し、隻影を認むること能はず。因りて昨日の戰場を巡りて、大同江の假泊地に還るや、第二遊擊隊其の他の諸艦、皆兵員を檣樓にのぼせ、歡呼して凱旋を祝せり。（小笠原長生）

## 第十二　小話二則

### 一　六太夫の晴雨計

「昔越後長岡在に六太夫といふ農夫あり、晴雨をトすること神に入り、一も違ふことなきに、村人深くこれを信じ、自らも亦篤く信じたりき。長岡の城主牧野侯この事を聞き、徵して扶持し、その秋の參勤

に伴ひて、東上せり。かくて。主侯、別邸において、客を招きて鴨獵せんとの企あり、その前日晴雨を六太夫にトせしめしに、『明日晴なり』と報ぜり。然るに何ぞ圖らん、當日大雨盆を傾くるごとく、主客皆濡れたり。こゝにおいて、主侯大いに怒り、六太夫を罰せしめぬ。

わづかに死を宥されて、遂はれて鄉に歸れり。鄉人その過ちし所以を問ふに、六太夫答へていはく、『初め鄉國にありては、いつも彌彦山に雲のかゝれる模樣によりて、晴雨をトせしに、江戸に至りて後、屋





に上りて四方を望めども、彌彦を見ること能はず。因りて止むことを得ずして、富士山に雲のかゝれる模樣を見てトせしに、かくのごとき過とはなれりと答へたり』といふ。（石黑忠悳）

## 二　熱地の蜜蜂

近き頃、澳斯太剌利に遊びて、歸りし人の話せるを聞きしに、其の地に、歐洲より移住せる人多きが中に、一人思ひけらく、この地に百花多けれども蜜蜂なし。本國より移したらんには、多くの蜜得て利あるべしとて、やがて歐洲より種良き蜜蜂あまた取

りよせて畜ひたりけるに、蜂ども移り來れる一二年は、常の如く蜜をも作りしに、年歴て後には、えつくらずなりぬ。

その人いぶかしとてよく考ふるに、もとより蜜蜂の蜜釀すは、一年一度の花の時に勉めて貯へて、その冬籠りの糧にせんとてなるに、澳地は熱地にて、四時花絶えず、春夏秋冬さらに糧に乏しき事なければ、蜜貯へぬもことわりにて、その人の企も空しくなりしのみならず、はてはをこなるわざしてけりと、人の物笑となれりといふ。（大槻文彦）





## 第十三　コロンブスの卵

西洋に「コロンブスの卵」といふ諺あり。この諺は、「事を創むるは難く、之に倣ふは易し」との意味なり。その由來を尋ぬるに、コロンブス、千辛萬苦を經て、亞米利加を發見したる後、西班牙に歸りしに、國王その前古未曾有の大發見を成せるを嘉みし、コロンブスを上賓として一大盛宴を張り、國の大臣貴顯を其の席に侍らしめたり。時に座客中、コロンブスの榮譽を嫉むものありて、窃に相語りて曰はく「コ

ロンブスの發見は、さまで稱するに足らず。かの國遠しといへども、元より天地間に現存する處なり。現存せる處を發見するに、何の難きことかある。たとへば嚢中の物を探ると同じ。榮譽とするにも足らず、功業といふにも足らず」と。

コロンブス、此の話を洩れ聞きしかど、さあらぬ體にて、亞米利加の風土などを、側の人々に語り合へり。しばらくして食卓上の卵一個を取り、これを衆客に示して、「諸君此の卵を卓上に直立せしむることを得るか」と問へり。衆客は互に顔見合せて、一語の答をなすものなかりしが、稍ありてコロンブスは、其の卵を卓上にて一打し、一方を平にして、これを卓上に直立せしめ、衆客に向ひ、「諸君、直立することと此の如し。諸君は之を見て、必ず『容易のことなり。何人も能くすべし』といはん。もし容易ならば、何故に余に先んじて之をせざりしぞ。抑も人の爲したる跡を見れば、世間爲し難きもの絶えてあることなし。今回の余が發見に於けるも亦然り。諸君は余の爲したる跡を見て、容易の事なりとせん。されど、いまだ發見せざる以前は、如何なりしぞ」といひし

かば、座客みな默然として一言もなかりきとぞ。是より「コロンブスの卵」といふ諺、世につたはりしなり。（補習讀本）

## 第十四　見識

人は賢不肖共に、身分相應の見識なかるべからず。己に思ひ定めたる見識なければ、容易に人の言に動され、一時の得失に惑されて、此を失ひ彼をも取らずして、一生を誤るに至るべし。

昔貧しき人あり。傘を張ることを習ひてありしに、





その年日照うち續きて、傘を買ふ者なし。さては世渡りに益なしとて打棄てつ。此の日照には、井の水を汲む桔槔（はねつるべ）こそ賣れ行くべけれと思ひて、作りならひしに、大雨降り出でて水充ち滿ちたれば、はね釣瓶は買ふ人なし。さらば元の傘をと思ひ立ちしに、折ふし世の中亂れて戰起り、武具のはやることは夥し。此の男、又心動き、武具を作りてなりはひとせむと、色々に思へども、急に習ひ得べくもあらず。とかくする程に、終に餓ゑて死にたりきとぞ。

又昔猫を畜ふ者あり。名をば虎とつけたり。或る人

其の故を問ひしに、「此の猫、鼠を捕ること極めて敏捷にして、未だ一度も過たず。物は虎より猛きもの無ければ」と答ふ。其の人「虎の猛きはさることながら、世に龍虎といひて、龍は虎よりも勝れり」といふに、さらばとて龍と名づけたり。然るに又人來りて、「それもまだ至らぬ考なり。雲なくては、龍も其のはたらきをなすこと能はず」といふ。げにもと思ひて、雲と名づけむとせしに、又「雲を吹き散すは風なり。風こそよからめ」といふ人あれば、風と改め置きたり。こゝに又人の「風は雲を吹き散せども、壁ありて遮る時は、止るならずや」といふに、いたく惑ひて、あたりの人に問ひしに、「壁も呼びにくからむ。壁に穴を穿つ者は鼠なり。それを捕る者は、猫の外にあるまじ」といはれ、始めて我が愚なるに心づきたりきといふ。

## 第十五　十四歳の頼宣

徳川氏の三家の一つであつた、紀州家の先祖頼宣は、南龍公といはれて、文武兼備の名君であつた。元和元年大阪夏陣の時、頼宣は十四歳で、二條の城

に居つたが、五月七日、先陣は既に軍が始つたと聞いて、もみに揉んで大阪に馳せつけた。ところが城は疾くに落ちて、軍もすんで居るので頼宣はひどく失望し、茶臼山の家康の陣に行き、先陣でなかつた爲に、今日の軍にあひかれ、返す返すも殘念だといつて、はら〳〵と涙を流した。

その時松平正綱が側に居て、「あなたはまだ年も御若いから、一代の中には、か樣な事に幾度もあはれるにちがひない。あまり御恨なされずとも」と慰めると、頼宣は、きつと氣色をかへ、「この方が十四歳に逢ふことが、又と有るか」といつて、正綱をはつたと睨んだ。この體を見てゐた家康は、嬉しげに「今の一言は、如何樣な戰功よりも功名だ」といつて大層喜ぶ、細川忠興などの大名たちも、之を聞いて、「虎の子は地に落ちるより、牛を食ふ勢がある」といつてあるが、誠におそろしい氣象だといつて、舌を卷いて感心したといふことである。

## 第十六　五腰の刀の主

秀吉伏見にありし時、廣間にて五腰の刀を見て、試

に其の主をいはんとて指ししに、少しも違はず。前田玄以「誠に神智を有たせ給ふよ」と驚きたれば、秀吉笑って「何の子細もなきことなり。秀家は美麗を好めば、黄金を鏤めたる刀、是なるべし。景勝は父の時より長劍を好めり。寸の延びたる刀を是にあてたり。利家は又左衞門と云ひし時より、先陣後殿の武功により、今大國を領すれども、昔をわすれず。革巻きたる柄の刀、是他の主に非ず。輝元は異風を好む。異なる體に飾りなせる刀、是ならん。家康は大勇にして、一劍を賴む心なし。取繕ひたる事もなき刀、



其の志に叶ひたり。此を以って察せしに、違はざりき」といひきとなり。

## 第十七　天野屋利兵衞

利兵衞姓は橘、氏は天野、實名を直之といふ。其の先右馬頭流浪し、大阪に來り、後祝髮して仁齋と號す。其の子彌三右衞門、相俱に武器を解きて、商人となる。其の頃池田勝入の臣土倉四郎兵衞と、知己の因あるにより、小牧・關が原等の役に、池田家の用金を辨じ、且又大阪陣には、仁齋父子の働を以て、神崎川

の舟を用意せしかば、備前の兵、諸家に先だちて到著せり。武藏守利隆これらの事を稱美して、仁齋父子を士分に取立つべき沙汰ありしを、仁齋固辭して受けざりき。

其の後、大阪に於いて、備前の藏元となり、又京師の吳服用商人となれり。仁齋家を二つに分ち、嫡子彌三右衞門は、京師に居を構へて、吳服物を始め、其の他の用達方をつとめ、二男理兵衞は、其のまゝ大阪に於いて、藏元を勤めたり。是利兵衞の祖なり。仁齋茶道を嗜みて、諸家に出入せし因により、利兵衞直





之の代に至りても、諸家に出入し、且大阪町惣年寄を勤めたり。利兵衞、ことに赤穗の城主淺野氏に出入して、眷顧を受けたり。

されば元祿の變あるや、利兵衞走りて赤穗に赴き、平生の恩を報いんとせり。大石良雄諸士と復讎の議を定むるに及びて、堅く秘して其の謀を洩さず。世絶えてこれ知るものなかりき。良雄、獨利兵衞の人となりを知り、大事を洩して、凡そ用うる所の兵什器械一切を製造せしむ。利兵衞自ら工肆の間を奔走し、一器を製すれば一器を送り、毫も妻子に知

らしめず。

然るに鍛工神力といふもの、其の製作の奇異なるを怪み、諾して造らず、町奉行所に訴ふ。奉行利兵衛を召してこれを詰る。利兵衛曰はく、「坊間盗難に備ふる爲、造れるなり。其の製作の異常なるは、一武人の創意する所、聊それに倣へるのみ」と。時に府下の鍛工傳へ聞きて後難を恐れ、利兵衛の爲に兵器を作れるもの、一時にこれを訴ふ。こゝに於いて、奉行遂に利兵衛を獄に下し、拷問すること甚急なり。然れども更に服する色なし。因りて妻子を捕へて、拷





問を加へしむ。利兵衛曰はく、「此の事家人少しもこれを知らず。請ふ、其の受くる所を以て、利兵衛の一身に加へよ」と。奉行復水火を以て、利兵衛を鞫訊せしかば、軀に完膚なく、殆ど氣絶せしこと數回なりき。利兵衛請ひて曰はく、此の事深き子細あり、始より生を期せず。但し明春に至らば自首すべし。然らざれば、身齏粉となるも、決して實をいはず」と。容貌自若慝す所なきに似たり。こゝを以て奉行暫く許して問はず。

其の年も既に暮れ、世間盛に赤穗義士復讎の事を

傳へ、獄卒徒隷も皆傳稱す。利兵衛出廷を請ひ、其の虚實を確む。奉行松野河内守實を以て答ふ。利兵衛悅びて自首して曰はく、「僕世々赤穗城主の恩顧を受く。義譜代の臣下に同じ。諸士事を圖るに當りて、僕に囑して兵器を造らしむ。曩に造りしは、即ち其の用なり。今既に復讎の事をきく。僕が事畢りぬ。只事の洩るゝを恐れ、又刑の及ばんことを憫み、妻子をして知らしめざりき。冀はくは彼等の刑を宥し、僕一人をして鼎鑊に就かしめよ」と。言畢りて涙雨の如く流る。奉行これを聞き、其の義心に感じて、死を赦し、家資を其の子に賜ひて、町年寄を襲がしむ。』

はじめ、利兵衛暑月の頃赤穗に到り、城庫の什器を曝せるに會ひ、良雄に請ひてこれを一覽せしに、間もなく一玉椀紛失し、衆皆利兵衛を疑へり。良雄大に驚き、利兵衛を召し、語るに狀を以てす。利兵衛恬然として曰はく、「僕實にこれを竊めり。速に刑を受けん」と。時に近侍のもの潛に之を赤穗侯に告ぐ。侯袖間より之を出して曰はく、「我取りて翫弄せしのみ。彼の知る所にあらず」と。是に於いて群疑始めて解けたり。良雄心に其の人となりを奇とせしかば、

元祿の變起るに及びて、大事を托せしなりとぞ。出獄の後京師に入り、瑞光院に寓し、姓名を改めて松永土齋と稱し、壽を以て終れりといふ。（横井時冬）

## 第十八　アイヌの昔話その一

昔十勝の國の强かりし時、サツナイの大酋長、全國の衆を集め、隣國なる石狩のやゝ衰へたるに乘じ、其の國に侵し入り、其の酋長と相見て、言葉戰をはじめ、若し服せざる時は、武力を用ゐて、寶物を奪はむとせり。





石狩の人々は、この報を聞きて、などか恐れざらむ。夕張の大酋長は、全國のおとなを呼び集め、右の次第を告げ、且いへらく、「わが國は人少く勢弱し。武力にては叶ふまじければ、辯士を遣し、講和の策を行ひ、かれらの國境に入らぬやうにするこそ肝要なれ。この任に當るべきものは誰かある。諸子よく知る人あらば、申し出でよ」といふ。聲に應じて、末席なる少年、眼を瞋し、肩をそびやかして、大音あげ、「われ願はくは此の任に當らむ」といふ。一座の人々驚きてこれを視るに、その少年は、上川郡なるナイタイ

べ村の、シラテッカといふものなり。

此の少年は、元來十勝の國オベロベロフの酋長の庶子にて、幼き時より母に隨ひて、石狩に來りしが、豪邁にして、辯論を善くすとの聞えあり。平生石狩人の深切なる待遇に感激し、好き折もあらば、身を棄てゝ恩に報ぜむと、心がけ居たりしを、今日大酋長の言を聞き、國難にあたらむと思ひて、望みたるなり。

大酋長その人となりを案ずるに、いかにも大事を托すべき風采ある者なりければ、悅びてその請を





許し、即時に擧げて副酋長となし、延いておのが次に坐せしめ、講和の策を行ふ爲の幣物として、石狩の國に古より傳來せる、寶物數種を取り出して授けたり。シラテッカは之を受けて家に歸り、旅裝を調へて路に上り、十勝石狩國の境なる佐幌嶺を越え、敵の進み來るべき要處を選み、假小屋を作りて、その中に待ち居たり。

日を經て、十勝の大勢、嶺の麓に來り屯せり。かくと見るよりシラテッカは、寶物を懷にして十勝人の居る處に至り、大呼していへらく、われは石狩の副

酋長シラテッカと云ふものなり。こゝにて諸君の來るを待ち居たり。願はくは諸君の酋長に見參せむ」といへば、取次のものども、之を引きて、サッナイの大酋長の前に至れり。

## 第十九　アイヌの昔話その二

シラテッカは、ただ一應の挨拶して、「おん身は誰ぞ」と問へば、「サッナイの大酋長某なり」と答ふ。シラテッカ再「御身は、何故大勢を引率して、此の地に來給へる」と問へば、サッナイの大酋長答へて、「石狩は舊





國にて、寶物に富めりと聞く。わが國は人多けれども、寶物に乏しければ、貴國の寶物を得むために來れるなり。貴國これを許さむや」といふ。

シラテッカいふやう、「御身の宣ふことは、道理にあはぬことなれば、思ひ止り給ふべし。御身は十勝川の源を知り給へりや。また石狩川の源を知りたまへりや。」サッナイの大酋長いふやう、「われ善く之を知れり。知りたればいかがあるべきぞ。」シラテッカいふ、「御身もしよく二川の源を知り給ふほどならば、此の度の如き非道なる御振舞あるべきやうな

し。それ十勝川は、源を大十勝岳に發するにあらずや。石狩川も亦同じく源を大十勝岳に發するにあらずや。十勝川、石狩川は、昔より蝦夷が父母の川と唱へたり。二川の兩國に注ぐ有樣を見るに、一人の母の乳房より乳汁の出づるが如し。兩國の人は、此の母の乳汁に養はれて、生を保つことなれば、兩國の蝦夷は兄弟なるべし。果して兄弟ならば、互に暴を加ふることあるべからず。殊に仁愛なる貴國人の、爲すに忍びざる事なるべし。此の事能く勘辨したまはむやといふ。



サッナイの大酋長は、之を聞きて默して居たりしが、稍ありて笑ひながらいふやう、「足下安心せよ。前にいへるは戲言なり。足下宜しく我が爲に、夕張の大酋長に告げ給ふべし。今より後は十勝、石狩の兩國、兄弟の交をなして、互に相侵す事なかるべし」と。之を聞くよりシラテッカは、俄に容を改め、頓首再拜して曰はく、「サッナイの長者、海の如き量をもつて、我が言を容れ、兩國永く相侵さざらむ事を誓ひ給ふ。兩國の幸何物か之に過ぎむ。わが夕張の大酋長、かねて某に命じていへらく、『汝幸にしてサッナ

イの大酋長に謁見する事を得ば、石狩の古より傳來せる七種の寶物を上れ』とて、某之を持ち來れり。願はくは却くる事なかれ」とて、懷より取り出して捧げたれば、サッナイの大酋長、大に悅びて之を受け、且いへらく、「夕張の大酋長われに厚幣を贈れり。われも亦これに酬いざらむや」とて、先づ酒を設けてシラテッカを饗し、一人のおとなをして之を送らしめ、五種の寶物を贈りたり。

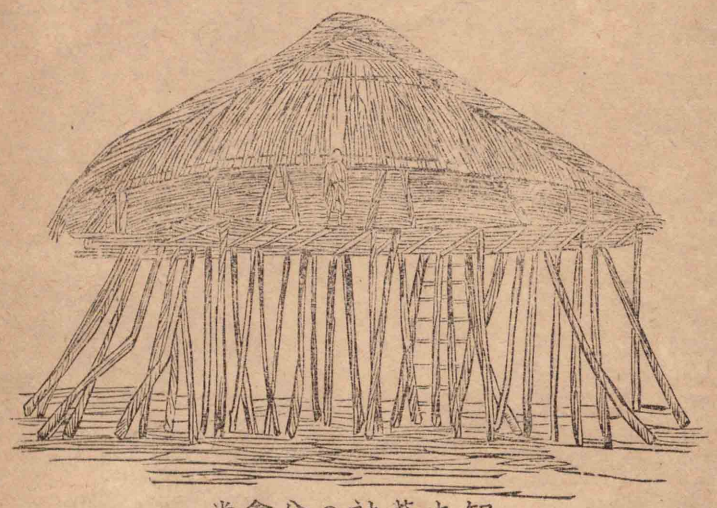
是より兩國長く無事なりしは、全くシラテッカの勇俠にして、辭令の巧なりしによる事なれども、夕張の大酋長に人を知る明なく、サッナイの大酋長に、事理を聞き分くる程の聰なからんには、シラテッカは、ひとり功を成すこと能はざりしなるべしと、後の人いひあへり。（細川潤次郎）

## 第二十　臺灣の風俗

臺灣の土蕃に、熟蕃といひ、生蕃といふあり。熟蕃とは、久しく支那の風化を受けて、衣食住なども聊進歩したる者をいひ、生蕃とは、未開の野蠻人をいふ。今この蕃族について一二の事をいはば、生蕃の中

にバイワン種族といふは、最も古く棲住せる蕃民にして、軀幹長大に、顏面銅色を帶びて、その性殘忍なり。怒るときは、その身を忘れて、生命をも顧みざるに至る。常に高山の絶頂に住み、衣服は、布の類の膝掛に似たる物をもて、前後より胸と脊とに當て、更にその上を鹿皮をもて被へり。この蕃人の殘酷なるは、毎歳秋季に行ふ人頭祭をもて推知すべし。人頭祭とは、部落中の各所より髑髏を齎し來りて、一場の展覽會を開く事にて、髑髏の多少に由りて、優劣をも定めて、優等者には賞與をも行ふ事あり





知本蕃社の公會堂

といふ。明治七年臺灣征討の時、驚悍の聞えありし牡丹社といふも、この種族なり。

又デボン種族といふは、軀幹バイワン種族よりは短小にして、その性もバイワン種族よりは溫和なり。衣服は、脚袴と胸當とにて、寒冷の候には牛皮をその上

に被ふ。但し此の種族の酋長は、手腕および手甲、手指などに刺繍を施して、儀式だちたる當日などには、花毛氈の類にて作りたる長衣を着す。この種族は、專ら農耕をつとめ、また漁獵にも從事して、鐵工、銀工などの職業を營めるもあり。

生蕃の爭鬪は、多くは深林の中に於いてす。爭鬪には、豫め使者をもて、期日と場所とを定め置き、當日に至れば、雙方より五六尺許なる竹竿の末に、五六寸許なる鏃の穗をすげたるを横たへ、また鐵欄木室の、二尺許なる反身の刀を提げ出でて、石を飛し





箭を放ち、入り亂れて散々に鬪ふ。さて日暮に至る時は、雙方死傷の多少を數へ較べて、勝敗を決し、敗者は勝者に償物を出して和解すといふ。

漁獵または農耕に從事する、東海岸の諸部落にては、蕃人の家屋處々に散在せりといへども、周圍に墻壁を築く等の事なし。但し南部の山中に棲める蕃人、およびデボン種族等は、數家屋を一團として、壘壁の如きものを築き、周圍に樹林または竹藪などを繞して、他族の來襲に備へたり。

また彼の牡丹社の如きは、海面より高き事四千尺

許なる山中に部落を設け、崎嶇羊腸たる岩石の上を通路として、その近傍には、かねて巨木大石の類を積めり。是敵の來襲に備へたるにて、敵もし來る時は、之を轉下して防禦するなり。

この種族の岩石の上を走るは、常人の平地を行くよりも疾くして、その輕捷なること、殆ど猿猴の如し。すべて蕃人は、物の迷ふかくして、夜半に犬の遠吠するを聞く時は、家内に死者ありとして、僧を請じて祈禱し、また旅行せる途中にて、噴嚏する事ある時は、凶事ある兆なりとして、既に近くその地に





達せんまで行きたる時も、往くを止めて家に歸るといふ。（物集高見）

## 第二十一　石炭の話

昔、地上に繁茂したりし植物の倒れたるが、或は朽敗して湖沼等の底に沈み、或は河流に從ひて流れ、遂に土砂の中に埋れなどして、許多の年月を經、其の質自然に分解して、燃え易き部分のみ殘りたるもの、即ち今の石炭なり。かく分解して炭化することは、地中にては絶えず行はるゝ作用にして、我が

國の仙臺より産する埋木の如きは、未だその經過の途中に在るものなり。されば其の經過のほど、炭質の純良なるべき理にして、かの無煙炭は其の最上に位し、黑炭、褐炭之に亞ぎ、泥炭は最も多く不純分を含めり。

石炭は、近世の運輸交通、及諸般の製造工業には、必要缺く可からざるものにして、此等の事業の發達するに從ひ、其の需用益、增進し、之が供給の多寡は、一國工業の盛衰に、緊切なる關係を有するに至れり。今日英國が、富强を以て世界に著名なるは、其の





莫大なる石炭の寶庫を有せること、一大原因たりといふ。

最近の調査によれば、各國中最も多く石炭を産するは、北米合衆國にして、年額三億噸に及べども、多くは之を國内の需用に供す。次は英國にて、年産額は二億三千萬噸に達し、盛に外國に輸出し、其の炭質の優良なること、他國に其の比を見ず。殊にウェールスの南岸カーヂフ港より輸出するものは、所謂カーヂフ炭にして、最上等の無煙炭なり。其の他獨逸の一億五千萬噸、墺太利の四千萬噸、佛蘭西の

三千三百萬噸、白耳義の二千五百萬噸、露西亞の一千五百萬噸等之に亞げり。

我が國の採炭業は、最近數十年間の歴史を有するに過ぎず。之を燃料として採掘すること、長門の船木、筑前の久留米などには、その以前より行はれたりしかど、唯其の近傍の地方にて使用するに止り、旅行者などは、痛く之を珍しとして、一二塊を携へ歸りて、家苞とするが如き有樣なりき。今や明治の代に至り、九州の北部及北海道にて、盛に採掘を行ひ、年産額一千萬噸に及び、其の三分の一を海外に



輸出し、內地にては、三百七十餘萬噸を諸種の工場に、百七十萬噸を船舶に、八十二萬噸を製鹽に、七十萬噸を鐵道用に使用す。其の品質は褐炭の上位に在り。

石炭は普通燃料として使用せらるゝ外、之を眞空內に强熱して、諸種の工業用藥品たるコールタール、燈火、炊爨、煖室等の用に供せらるゝ石炭瓦斯、及製鐵燃料たる骸炭を採收する等、其の利用極めて廣し。されば其の產額の增減は、吾等人類の利福に關係すること、亦至大なりといはざるべからず。然る

に諸種の建築造船等に、鐵類の使用益盛なる結果、強大なる火力を要し、其の他諸般の需用年々激増して、底止する所を知らざる有様なるが故に、採掘の限度に達する時期、意外に速なるべしといふ。かのスコツトランドの地下は、悉く石炭なりと稱せられ、恰も無盡藏なるかの如くに思はれしかど、西暦千八百七十三年の調査によりて、爾後三千年の使用に堪ふべしと計量せられしもの、それより三十年を經たる數年前の調査によれば、僅に二百六十年の上に出でざるべしといふ。是蓋し計算の錯誤に因るにあらずして、需用增加の結果に外ならざるなり。

## 第二十二　汽車の路

一日上野より汽車に乘りて、ものへ行く事あり。六月の初なれば。薄綠に染め渡したる若葉のにほひ、見渡す限なつかしからぬはなし。花もあれど、紅葉もあれど、しめやかなる野山の景色は、春くれて夏なほ幼き頃にしくべくもあらず。

古寺の庭に、紅つやゝかなるは、若楓なるべし。散り

殘りたる薔薇の花も、三つ五つ此方の垣根に見ゆ。小暗き葉櫻の蔭には、一人の老翁箒をとどめて、我が車の馳せ來るを眺めつゝ立てり。

里すぎて田の中を行く。苗代は水より出づる事三四寸、時を得顏に榮えたり。牛追ひ入れて、泥深く下り立つ賤の男を見れば、農事は今より忙しからんとす。小女の桑摘みかへる路には、咲きこぼれたる卯の花雪の如し。

麥は刈りしほなるべし。天地綠なる間を色どりて、赤らみわたれるこそ美しけれ。鎌とり持ちて、つかつかと刈りゆくもあれば、束ねて家に運ぶもあり。

あはれ住み馴れたる麥生の雲雀は、ふしどを奪はれて、夕ぐれかへる路や迷はん。汽車には畫師書生あり。窓に向ひて變る景色を寫しつゝ行く。傍に立ちて居たる田舍娘は、珍し顏にさし覗きて、筆の行方に目を送れり。我もし畫を知らば、是も好き畫題とならましものを。娘は簪を落して身を屈め、畫師は筆を止めて、鳥の飛ぶ方を見やる。（大和田建樹）





## 第二十三　遠足

一

ながるゝ水は大鼓の聲
松ふく風は唱歌の聲
旅だつあしたの心の愉快さ
いざ越せあの山
いざ踏め此の露

二

ひとむら茂る林のおく
社か寺か道あるかた
日かげは霞めり小鳥は歌へり





進めや我が友
古蹟をたづねて

三

みどりの山は過ぎこしあと
はてなき海は今ゆくさき
自然を友なる旅路のたのしさ
いざ呼べあの舟
いざ切れあの波（大和田建樹）

## 第二十四　海水浴

世の文明に進むに隨ひて、人々衞生に注意し、病を未發に防がむとするは、社會一般の狀態にして、近時專ら流行する海水浴の如きも、其の一方法として案出せられたるなり。

海水浴の時期は、七八兩月および九月上旬にして、海水の溫度、攝氏の十五度乃至十七八度の間にあり。之を吾人の體溫に比すれば、殆ど二十度餘の差あれば、入浴の際、此の寒冷作用により、皮膚は蒼白色となり、血液は多く身體の內部に集れども、浴後は却つて反動の爲に、皮膚の血管擴張して潮紅し、





溫暖となるなり。殊に入浴の際、海水に含める鹽分と、波浪および細砂の動搖とは、共に皆身體を刺衝して、皮膚を强固にし、諸機關の作用を敏活ならしむる故に、食欲おのづから進み、身體の營養を增進し、隨つて感冒その他の疾病を防ぐ事を得るなり。

然のみならず、海濱の空氣は、酸素とオゾーンとの含量多くして、炭酸少く、塵埃及細菌を含むこと稀に、水蒸氣を含みて物の乾燥を防ぎ、或は晝夜溫度の變化甚しからざるが如き、又海濱の微風衣を拂うて、皮膚に微寒を感ぜしむるが爲に、蒸發をよく

するが如き、直接間接の利益、算し來れば、殆ど指を屈するに遑あらざるなり。

彼の漾々たる海上、水波起らず、遙に水天の相接する邊、浮鷗に似たる白帆の去來するを見、砂白き海邊に憩ひて、松吹く風の琴瑟を鼓するを聞き、はた巖に碎くる白浪の花と散りかふを眺め、洗はれ出づる月影の玉と輝くに對しては、神氣おのづから爽然として、自然の賜物の偉大なるに驚かむ。

さて、我が國にて有名なる海水浴場は、西に須磨、舞子、明石あり。東に大磯、鎌倉、逗子あり。是等はもとよ



り景勝の地なると、大都に近きとによりて、殊更に著れたるならむ。此の他にもなほ求めなば、南に北に、波穏にして風涼しき海岸の、吾人を待つもの、到る處に多かるべし。

## 第二十五　霧の都

聞きしに優りたるは、倫敦の深霧なり。市中凡そ四里四方、さながら黑雲に蓋はれたるが如し。秋より冬にかけては、太陽の光を見ること稀に、常に陰鬱として、いぶせさ言ふべからず。かくて、咫尺をだに

辨ぜざる日には、巡査は町の兩側に立ち連りて、その家の番號を叫び、市人は白晝に燭を照し、塀傳ひにて歩行するに至る。かゝる時は、瓦斯燈も點ぜられど、その光おぼろにして、薄絹につゝまれたるがごとく、馬車も嚴重に警戒を加へつゝ徐行すれど、猶過なきこと能はず。然らざる日も、大方五六間先は能く明ならざれば、猶家に添ひ、橋の欄干によりなどして、行くこと珍しからず。諺に「小刀にて霧を切りゆけ」といふことあるは眞なり。

之に加ふるに、人家稠密にして、製造所多く、烟突の





烟は常に深霧に壓せられて、再降り來るが故に、町を一廻して歸れば、白襟、白シャツは忽に黑色に變じ、鼻と耳との孔には、少からぬ黑塵を宿せしむるに至る。抑もいづこの里にも霧のなきはなく、殊に未開の地などは、深霧咫尺を辨せざるは、珍しからぬ事なれども、此處の如く黑塵相交りて、家を燻べ人を燻ぶる處はあらざるべし。されども、當市の人は、之を何とも思はず。思はざるのみにあらず、なるべく霧深からざれば、事を執るに心落ち著かずといへり。

友人某、一日市を歩き、太陽の西方に沒せる狀を見て、大時計なりと思ひ、熟視して自ら腹を抱へし事ありき。日暮れて後テームス川を見渡せば、一面の川霧は市に續きて、目につく者は、唯船の燭と家々の燭となり。其の狀、暗夜に數萬の螢の飛びかふともいふべし。昔江戸にては、火事を都の花としたりき。倫敦にては、今猶霧を都の花と思へり。（池邊義象）

## 第二十六　自然の音樂

聲の調子に一定の高低ありて、節面白く鳴り響くを音樂といふ。琴、笛三味線、ピアノ、オルガン、唱歌などの音曲は、通例謂ふ所の音樂なり。されどかゝる人爲の音樂の外に、自然の音樂とも謂ふべきものあり。鶯、雲雀、松蟲の聲など是なり。其の他心を留めて萬物の聲を聞けば、松風にも、水の聲にも、自然に美しきしらべはあるなり。

鷄も歌ひ、烏も鳴く。雀、雲雀、山がらなど、百鳥の聲皆音樂なり。鳶の高き天に歌ひ、鳩の低き梢に鳴く。是もまた音樂なり。或鳥の音は笛の如く、或者は琴の如く、或者は胡弓の如し。

ひぐらしの聲に夕日沈めば、松蟲、鈴蟲、機織こほろぎなど鳴き出づ。或は金の板を叩くがごとく、或は銀の鈴を振るが如し。蛙、蟬、蜂など皆それぞれに樂を奏す。草を吹く風、空高く吹く風など、風も各その音色を異にす。或は琴の如く、或は笙の如く、或はひちりきの如し。

水の音樂は、更に面白し。泉の水の湧き出づる音は、琴、尺八、ピアノの曲とも聞くべく、落葉をくぐる細き流の聲は、琵琶、月琴の調にも似たり。軒の雨垂を豆太鼓の音に喩ふれば、瀑布のどうどうと落つるは、大太鼓の響にも喩ふべし。かの大海の波の音の、物すごく勇ましきに至りては、喩へんに物なし。

（坪内雄藏）





## 第二十七　蚜蟲の一生

われらが花壇の薔薇の蕾、又はその嫩芽などには、緑色の微蟲が數知れず取りつきて、首をあつめて何事をか相談せるが如くなるを見ることあらむ。この蟲は群居を好み、必ず頭端を下方に向け、膨れたる其の腹部を上にして、屢之を微動せしむ。其の

態一種の奇觀なり。

この蟲の口には、長き吻あり。之を挿入して、薔薇よりその養液を吸收するにより、薔薇は漸く衰弱して、遂に枯死するに至る。この蟲は蚜蟲とて、無翅の微蟲なれば、拂ひ退けむこと甚だ難し。

この蟲、時々その腹部の末端より、綠色の塊狀物を排泄することあり。この塊狀物は、蚜蟲の仔蟲にして、二本の觸角と六本の短き脚とを具ふ。こは卵生にあらずして胎生なり。一頭の仔蟲を產みたる母蟲は、第二第三の仔蟲を續けざまに產み出して、毫





も疲勞の狀なく、その繁殖頗る速なり。

今詳にこの蟲體を觀察するに、腹部には二個の乳管ありて、其の尖端より透明の液を分泌す。この液體は、母蟲がその仔蟲の養料と爲すものにて、もと薔薇の養料より精製したるものなれば、その味極めて甘し。この甘液の分泌せらるるがために、蚜蟲と黑蟻との間に甚親密なる關係あり。黑蟻は頗るこの甘液を好み、その頭部に具へたる二本の觸角を弄して、蚜蟲の乳管に觸れ、飽くまでその甘液を吸收せんとするに、蚜蟲は聊もおそるるさまなく、

却って多量の液を分泌して之に給す。されば黒蟻は蚜蟲を保護し、樹枝の養料おほきを見出でては、之を口に咬へて移殖し、かくして盛に甘液を分泌せしめては、自己の腹を肥すこと、恰もわれらが牛を飼ひて、其の乳を搾取するに異ならず。而して蚜蟲が甘液を給するは、黒蟻に限れるが如くなるは奇といふべし。

されど蚜蟲が薔薇に寄食することも、つねに必ずしも安全なるにはあらず。往々害敵の侵襲を蒙りて、捕食せらるゝを免れ難し。かの優曇華と稱する





物は、實は植物にはあらずして、青蜻蛉の卵なるが、之を蚜蟲の集團中に産み附くること屢あり。即ち青蜻蛉の母蟲は、その仔蟲の餌として、蚜蟲を捕食せしめんために、特にその集團を擇びたるにて、卵殼一度破綻すれば、仔蟲は活潑にその集團中を走り廻り、頭端に具へたる鋭利なる鋏を揮って、忽に蚜蟲を斃し、飽くまで之を捕食するなり。

蚜蟲の害敵には、これよりもなほ驚くべきものあり。そは寄生蜂とて、その腹端に突出せる針を用ゐて、蚜蟲の體内に産卵するものにて、その卵子は、間

もなく卵殼を破りて孵化し、微細なる白蛆となる。この白蛆は、恰も人體における條蟲の如く、體内の營養分を吸收して生育を遂げ、更にその場を最後の宿として、蛹化するものなれば、蚜蟲は至大の苦痛を感じ、その集團中を拔け出でて悶死するに至る。かくてその蛹蟲は、時機到れば體壁を破りて、青空に飛翔し去る。これ全く寄生蜂が、その巢を營む勞を省かんがために、殘酷にも營養佳良なる蚜蟲を利用するものなり。（木村小舟著「五十三の日曜」に據る）





## 第二十八　時間を惜むべし

事物を學修するに就きて、最も注意すべきは、時間を惜むことなり。時間は卽ち貨財なり。之を浪費するは、貨財を浪費するに同じ。殊に學者にありては、時間は貨財より貴きものなり。然れば、寸陰といへども空しく之を過ごさざらん事を欲せざるべからず。

既に自ら時間を惜む心あらば、他人を訪問しても、速に要用の事のみを述べ畢へて還るべく、決して他人をして我が爲に空しく時間を費さしむべか

らず。他人も我と同じく、時間を惜む心あるべければなり。

蓋し一日は小生命にして、醒覺は死生の如し。一日を過ぐれば、其の日は決して再來らず。如何なる日も、全く新しき經驗なり。是の故に、其の日其の日の業務を勉めて、幾分の進歩をなす念慮なかるべからず。若し一日を浪費するを以て、惜むに足らずとせば、一個月も亦惜む心なく、遂に一年も一生涯も、何の成す所なく、一夢の如く經過すべし。人にして此の如きは、蚯蚓、螻蟻と何の擇ぶ所かあらむ。





抑も人生は山を踰ゆるが如く、登るときは、遠きを覺ゆれども、其の半を過ぎて、降るに及んでは、極めて駿速なるを知る。故に人は年少の時に於いて、最も勉學するを要す。實に一生涯の事は、前半生の勤惰如何に因りて定ること、恰も一日の計は午前に定るが如し。然らば早く是等のことを曉得し、一生の計を定め、以て事物を學修せざるべからず。世に一生を浪費するより、遺憾なることなければなり。

（井上哲次郎）

## 第二十九　紙筆の學問

或る上方筋の少年、長崎にて醫術を學びけるに、師友の話の有益なるは、之を筆記し、有益の書籍は、之を寫し取りけるが、年經るままに數十卷となりぬ。さて歸鄕の期にもなりたれば、例の筆記寫本を行李のうちに收め、宿次の人足を雇ひて運搬せしめ、小倉の城下より舟に乘り、下の關さして漕ぎ行きけり。

然るに空の氣色俄に變り、風强く波高くなりて、一葉の舟は、忽ち空中に颺るが如く、忽ち深谷に墜つ





るが如く、動搖上下するに、乘組の人々は船底に臥し轉び、又は船舷に取り附き居たりしが、舟の舳艫に積み置きたる荷物は、悉く高浪に捲き去られぬ。この醫生、有益の事を忘れしとて物せしは、さる事ながら、すべての精神を紙筆にのみ委ねて、記憶に留めたる者少かりしかば、數年間の學問は、水の泡と消え失せたりきとぞ。學問する者は、同じ覆車の轍を踏まぬ樣にと、心に省るべきなり。（細川潤次郎）

## 第三十　日本魂

われ等日本人は、日本魂といふ、最も鞏固なる精神をもてり。この精神をもちて、この日本國を護り來りしかば、古より他國の侮を受けざるのみならず、世界無比の國なりといふ、名譽をさへ得るに至れるなり。今後この名譽を保たむも、失はむも、この精神の如何にあるべきを、おひおひこの精神を持てる者はすくなくなりゆくは、いかにぞや。

日本魂といふ精神をもてばこそ、まことの日本人なれ。これなくば、形こそあれ、まことの日本人とはいふべからず。何となれば、さる人は、亞米利加へ行





かむには、亞米利加人となり、英吉利へ渡らむには、英吉利人となるべければなり。むかし山崎闇齋といふ學者ありき。ある時その弟子に向ひ「若し孔子、孟子が大將となりて、この國に攻め來らば、いかにかする」と問ひしに、弟子ども答ふること能はず。闇齋容をあらため、「何をか躊躇する。たとひ、孔子、孟子なりとも、この國に害をなさむには、直にうちはらふべし。これやがて孔子、孟子の教ならずや」といへり。また荻生徂徠といふ學者ありき。こはきはめたる支那崇拜者にて、なにごとも、かれを尊ぶあまり、

遂に東夷の物茂卿と自稱して、怪まざるに至れり。闇齋といひ、徂徠といひ、おなじく漢書を讀みたるものなり。さるに、そのいふところ、かく異なるは、一はこの精神を保ち、一はこの精神を失ひたるがためなり。この徂徠のごとき人のみ多くならむには、この日本國の前途をいかにせむ。

世人はともすれば、富國强兵を口にせり。余おもふに、いかに學理は進歩すとも、實業は發達すとも、これに從事する人にして、この精神を失はむには、國家にとりて、何の利益もなからむ。また海に千萬の





艨艟を浮べ、陸に億萬の巨砲をならぶとも、それを運用する人にして、この精神なからむには、ただ一の形容の具に過ぎざらむ。いひかふれば、富國策も强兵論も、日本魂といふ精神を定めたる後にすべきなり。それを定めざるうちは、到底その實をあぐること能はざらむ。要するに日本魂ありて、はじめて日本人なり。日本人ありて、はじめて日本國なり。われわれ日本人たるもの、この日本魂といふ精神を失ひて可ならむや。（谷干城）

# 訂正中等國文讀本卷一終




明治三十六年十一月廿五日第一版發行
明治三十七年十一月廿一日第二版發行
明治三十七年十一月廿五日第三版發行
明治三十八年十二月廿一日第四版發行
明治三十九年十二月廿八日第五版發行
明治四十年二月十三日第六版發行
明治四十年十二月十日訂正第一版發行
明治四十年十二月十日訂正第二版發行
明治四十年十二月十日訂正第三版發行
明治四十年十二月十日訂正第四版發行
明治四十年十二月十日訂正第五版發行
明治四十年十二月十日訂正第六版發行


著作權所有


訂正中等國文讀本全十冊
各冊定價金貳拾壹錢

編纂者　國學院編輯部　代表者　高山昇

發行兼印刷者　合資會社吉川弘文館　代表者　吉川半七　東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

發行所　東京市京橋區南傳馬町壹丁目拾貳番地　合資會社吉川弘文館

印刷所　內外印刷株式會社分工場

永井